

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「学級の問題を全校の課題として捉える」

先日、ある小学校で開催された「特別支援教育運営委員会」に参加しました。「支援の必要な児童への関わり方について」というテーマと題し、低学年・中学年・高学年の3グループに分かれて、児童の困り感に対する支援内容の評価と改善点等について、支援員の先生方も加わり、有効な手立てを共有しました。印象に残ったケースを紹介します。



ケース会議後に児童が大きく変容した事例

- ・自閉スペクトラム症（ASD）の児童で、他者と折り合いを付けることが難しく、パニックになると校内中に響き渡るくらいの声を出すことがある。そこで、児童の望ましい行動を増やすために、夏季休業中に外部の関係機関（小・中学校等特別支援チーム）を招いてケース会議を開催し、これまでの指導を振り返った。

【有効だった手立て】

- ①事前に内容を視覚情報を基に確認したり、いくつかのパターンを用意したりして安心できる環境づくりを心掛けた結果、考えに幅が広がり、柔軟に活動できるようになった。
- ②児童が課題量を選んだり、思いを言葉で伝えたりする機会を増やした結果、活動に見通しをもって臨めるようになり、友達とのトラブルが減ってきた。

【ポイント1】「ど」の言葉を使って、子どもの自己選択・自己決定を促す（No.153より）

「ど」 うしたの？：子どもの状態を知る。（状況把握）

「ど」 うしたいの？：子どもの気持ちや思いを知る、受け止める。

「ど」 うしたらいいかな？：子どもが自ら答えを見付ける、選ぶ。

いずれも質問形で、話題を原因から解決法の方角に導くことができる。子どもは答えを与えてもらうのではなく、自分の思いを言葉で表現し、自分で決める。一人で答えを見付けることが難しいときは、実行できそうな選択肢を与えたり、一緒に解決策を考えたりする。

「ど」 うしてできないのと子どもを責めるのではなく、「ど」 うしたらできるようになるかなという温かいまなざしで、子ども、保護者と一緒に支援を考えていく。

【ポイント2】外部の関係機関とつながり、状況共有しながら支援のヒントをもらう

校内で解決が難しいケースについては、積極的に外部の関係機関とつながり、ケース会議を開催して支援のヒントをもらう。

就学相談（市町村教育委員会）、発達面で気になる子どもの相談（山本出張所、能代支援学校、JCHO秋田病院小児科ハートケア外来等）、不登校児童生徒の通級施設・相談（はまなす広場、あすなろ教室等）、児童生徒や保護者の困り感に合わせていつでもすぐ相談できるように、「地域資源マップ」を作成する。

【ポイント3】学級で起こっている問題を全校の課題として捉えて解決する

学校には、様々な教育的ニーズのある子どもが在籍しており、特別支援教育を一部の先生が担当する時代は終わった。また、一部の子どもだけのものでもない。全職員が特別支援教育運営委員会に参加することで、学級担任が一人で悩みを抱え込まず、学級の問題を全校の課題として捉えることができ、自校の課題解決力と教師の専門性向上につながる。一人一人を大事にする幅の広い特別支援教育を、学校教育の真ん中に位置付ける。



とれたて直送便



「子どもの発達を育む2つの視点」

- ①「できないこと」を探すよりも、「何ができるか」を探す視点。
- ②「できる・できない」のゼロイチ思考ではなく、どのような支援をすることでできるようになるか、それができるようになることで、子どもの生活がどう豊かになるのかという視点。